

「優歩」の由来の中に

栃木市立皆川中学校

2年 青木 優歩

もしあなたの兄妹に障害者がいたとしたらどうしますか。あなたにとって障害者とは何ですか。変な人？迷惑な人？どうでもいい人ですか。

私は三人兄妹の真ん中です。弟は健常者ですが、兄は障害者です。兄は生まれつき心臓に穴が開いているだけではなく、自閉症でもあります。どこかに出かけても、周囲のことが考えられず、自分の行きたいところにすぐ行ってしまい、迷子になってしまいます。

五年前の夏、私はその兄と一緒に、あるテーマパークに行きました。兄はうれしかったのでしょう。入場したとたん、すごい勢いで走り出し、あっという間に見失ってしまいました。必死に探すと、兄はある乗り物の前に立っていました。安心しながらも勝手な兄に少しあきれて、どうしたのかと聞くと、兄はその乗り物を指さして「乗る！」と言います。しかしそれは工事中でした。係員さんが工事中だから乗れないと優しく教えてくれたのですが、兄は納得せず号泣し、揚げ句の果てには係員さんや横を通る人に、暴力を振るい始めたのです。周囲の人たちは、そんな私達を冷たい目で見て、ひそひそ話を始めました。

また別の日のことです。買い物に行くと、兄が、折り紙が欲しいと言い出しました。しかし家には折り紙がたくさんあります。そのことを兄に説明しても、店中に響くような大声で泣くばかりです。そしてこのときも、あのテーマパークでの時のように、周囲の人は私達に冷たい視線を向け、ひそひそ話を始めました。まただ。この場から逃げ出したいと正直思いました。しかしそれは無理なことです。兄が泣き止むまで私は冷たい視線に耐えながら、その場にいるしかありませんでした。

兄と一緒にいるということは、私にとっては我慢することが多いということでした。何かあると、親や祖父母は、「仕方ないでしょ、お兄ちゃんは障害者なんだから。たまには我慢しなさい。」と言います。たまには。もう耳にたこができるほど言われました。もう十分我慢しています。これから先も、私はずっと我慢しなければいけないのでしょうか。私は不満でいっぱいでした。

ある日、ダンスの中から母子手帳を見つけました。そういえば私の名前の由来は何だったろうとふと思い、見てみると、「誰にでも優しくできる子。家族みんなで助け合って歩めるように。」と書いてありました。しかしまだ何かあったので取り出してみると、母の

日記でした。中を見ると、私の生まれる前数時間前から生まれる後まで記されていました。「午後零時一分頃にやっと生まれました。無事で良かったです。女の子なので、どんな名前にしようかな。」などと、細かなことが書かれていました。しかし母子手帳の時と由来が少し違っていました。読み進めてみると、「優歩ちゃんは誰にでも優しくできる子になってもらいたいな。でもお兄ちゃんは障害を持っているから大変だと思う。お兄ちゃんを支えてみんなで歩んでいける子になって欲しい。」とあります。母が兄の将来のこと、また自分のこれからのことを考え、名前に深い意味を込めたことを知り、なぜか涙ぐんでしまいました。

私は今までのことを振り返ってみました。私は母が望んだように兄を支えているのでしょうか。つけられた名前の通り生きているのでしょうか。冷たい視線を送る周囲の人達に対する怒りは、兄が嫌な思いをしているからだけではなく、私も嫌な思いをしたことに対するものではなかったのでしょうか。兄には私にはない良さもあります。何かの説明書など、一度見たものは細かなところまで記憶します。工作が得意で、身近にあるもので模型を作ってしまう。優しい気持ちでそんな兄を見てきたのに、何かの瞬間に忘れてしまうのです。兄を冷たい視線で見っていたのは周囲の人だけではなく、何より優しくしなければならない自分だったことに気づきました。身近な家族が、障害を持つ人に温かく接しないで、周囲の人の目を変えることはできません。まずは自分自身が変わる必要があるのです。

もしかするとこれから先、「我慢している」と思うことが、まだあるかもしれせん。一緒に生活するということ、それがこれからもずっと続くことの大変さも想像ができるからです。しかし私はいつの日か、親がつけてくれた名前の通り、心の底から兄を支え生きていける人になりたいと思います。障害者に対する差別や偏見のない社会を築いていくために、まずは私自身が変わっていきたいと思います。